

日本 18 世紀学会
第 48 回全国大会レジュメ集

2026 年 6 月 27 日 (土)・28 日 (日)

関西学院大学 (西宮上ヶ原キャンパス)

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

日本 18 世紀学会 第 48 回全国大会プログラム

6 月 27 日 (土)

10:00-10:10 開会式 (F304/URL1)

開会挨拶 武田 将明 (代表幹事・東京大学)

10:10-10:55 自由論題報告

F304/URL1 飯田 賢徳 (筑波大学)

「ルソーは honnêteté に何を見たか—書簡 592 における honnêteté の用法—」

司会：坂倉 裕治 (早稲田大学)

F305/URL2 大林 侑平 (三重大学)

「神・金・力——官房学と世俗化の問題——」

司会：紫垣 聡 (大阪大学)

11:05-11:50 自由論題報告 (2)

F304/URL1 水野 友晴

「コンディヤック記号論の発展史的解釈」

司会：馬場 朗 (東京女子大学)

F305/URL2 藤木 明日香 (東京大学大学院)

「メアリー・トフト事件におけるパンフレット出版——政治風刺と出版業者の視点から」

司会：原田 範行 (慶應義塾大学)

11:50-12:50 昼食・幹事会 (幹事会 F204)

12:50-13:35 自由論題報告 (3)

F304/URL1 今野 友梨香 (ソルボンヌ大学大学院)

「『新エロイーズ』における父娘の近親相姦的な描写——愛情と恥じらい、愛着と血縁、母親の視線——」

司会：齋藤 山人 (日本大学)

F305/URL2 中地 拓馬 (東京大学大学院)

「『トリストラム・シャンディ』とラティチューディナリアニズム——信仰と懐疑主義をめぐって——」

司会：内田 勝 (岐阜大学)

13:45-14:30 自由論題報告 (4)

F304/URL1 小泉 幸太 (東京都立大学大学院)

「『百科全書』とデュ・シャトレ『物理学教程』——ライプニッツ＝ヴォルフ哲学を中心に——」

司会：川村 文重 (慶應義塾大学)

F305/URL2 岡本 侑樹 (東京大学大学院)

「ジェームス・マッキントッシュの見たフランス革命：1791～1815」

司会：楠田 悠貴 (立命館大学)

14:40-15:25 自由論題報告

F304/URL1 淵田 仁 (城西大学)

「説得するジュスティーン——サド『美德の不幸』における対話のあり方——」

司会：鈴木 球子 (信州大学)

F305/URL2 二藤 拓人 (西南学院大学)

「番号を振りながら書く——ドイツ初期ロマン派の思索ノートと人文主義の筆記法——」

司会：桑原 俊介 (東京大学)

15:35-16:20 自由論題報告 (6)

F304/URL1 福永 暁斗 (九州大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

「宗教教育の転換点としてのルソー——教会批判から近代的教育観の形成へ——」

司会：飯田 賢穂 (筑波大学)

F305/URL2 秋元 陽平 (ジュネーヴ大学大学院)

「微笑みと熱い涙——モーゼス・メンデルスゾーン『フェードン』における混合感情」

司会：杉山 卓史 (京都大学)

16:30-17:15 自由論題報告

F304/URL1 安藤 裕介 (立教大学)

「アングロマニーにしてルソーの愛読者？——ネッケルの思想的背景とジュネーヴ人ネットワーク——」

司会：永見 瑞木 (大阪公立大学)

F305/URL2 野村 梨咲子 (オレゴン州立大学大学院)

「18世紀後半のイギリスにおける心理的成長の象徴としてのチューリップと薔薇——植物学とウルストンクラフトの『実生活実話集』——」

司会：小川 公代 (上智大学)

17:45-18:45 レクチャー・コンサート（関西学院会館・風の間）【当日不開催】

《18世紀の舞踏譜にみる空間と身体》

レクチャー：木村 遥（成城大学）、貝田 かなえ（関西学院大学大学院）

舞踊・演奏：樋口 裕子（バロック・ダンス）、有門 奈緒子（バロック・ダンス）、
大内山 薫（バロック・ヴァイオリン）

共催：関西学院大学文学部美学芸術学研究室

19:00-21:00 懇親会（関西学院会館・光の間）【中止】

6月28日（日）

10:00-10:45 自由論題報告（8）

F304/URL3 貝原 伴寛（早稲田大学）

「フィロゾフ・アラモード——1720年のイエズス会学校演劇における哲学者とその
家族——」

司会：増田 都希（東海大学）

F305/URL4 若澤 佑典（慶應義塾大学）

「ヒューム哲学が始まるとき、結ばれるところ 知的探究のリズムをめぐって」

司会：森 直人（高知大学）

10:55-11:40 自由論題報告（9）

F304/URL3 田村 海斗（東京大学大学院）

「18世紀末における人間学の誕生とその可能性——初期ミシェル・フーコーにおけ
る啓蒙論と批判哲学論を中心に——」

司会：渡邊 浩一（福井県立大学）

F305/URL4 大崎 さやの（東京藝術大学）

「18世紀イタリアの演劇作品に見られる母親像——古典主義を超えて」

司会：奥 香織（明治大学）

11:50-13:00 総会（F304/URL3）

13:00-13:45 自由論題報告（10）

F304/URL3 源川 まり子（慶應義塾大学大学院）

「デュパン夫人と初期ルソー：性差の問題をめぐって」

司会：鳴子 博子（中央大学）

14:00-16:40 共通論題(F304/URL3)

「複数形のアメリカ——合衆国独立宣言 250 年を超えて」

司会：菅原 百合絵（京都大学）

趣旨説明 兼 第 1 報告 上村 剛（東京大学）

「先住民・土地所有・会社国家——アメリカ独立にいたる道の再考」

第 2 報告 安村 直己（青山学院大学）

「独立革命を<南>から見る——スペイン領アメリカ植民地との比較」

第 3 報告 王寺 賢太（東京大学）

「18 世紀フランスにおけるパラグアイ布教区とペンシルヴェニア植民地の対比論の変遷——『法の精神』から『両インド史』へ」

第 4 報告 中井 亜佐子（一橋大学）

「一度目は偉大な悲劇として、二度目は…… ——ハイチ革命の叙述と再演」

第1日 6月27日（土）10:10-10:55

会場：F304

自由論題報告（1）

ルソーは *honnêteté* に何を見たか—書簡592における *honnêteté* の用法—

飯田 賢穂（筑波大学）

司会：坂倉 裕治（早稲田大学）

本報告は、ジャン＝ジャック・ルソーが「ソフィー」ことドゥドト伯爵夫人に宛てた1757年12月17日付書簡（書簡592）における「*honnêteté*」の用法を分析することを目的とする。

1757年の友愛論争において、ルソーは、当時関係が急速に悪化していたドゥニ・デイドロがその戯曲『私生児』においてルソーに対しては放った警句「ただ悪人のみが独りである」に対抗しながら、〈友愛（*amitié*）〉とは何かを問い直した。その論争的文脈の中で、ドゥドト伯爵夫人が「あなたは私の友である以上、*honnête homme* である」と述べたことに対し、ルソーはこの概念およびその能力である「*honnêteté*」の批判的検討を試みる。

報告者はこれまで、書簡592において、ルソーがアリストテレス以来の友愛三分類——「有用性ゆえの友愛」「快ゆえの友愛」「徳ゆえの友愛」——を枠組みに用い、「徳ゆえの友愛」の優位を示そうとしていることを明らかにしてきた。本報告ではこの成果を踏まえ、17世紀後半の宮廷・サロン文化の中で形成された *honnête homme* 像——会話を媒介とする快い交流（*commerce agréable*）を実現する社交的徳——との緊張関係を検討する。

本報告の中心的課題は、ルソーが17世紀以来の *honnêteté* の用法を前提とし、それが持つ「規範への一致」という側面を認めつつも、18世紀における文人（*hommes de lettres*）とその庇護者との関係の中で *honnêteté* が発揮されることに対し、批判を展開している点を明らかにすることである。18世紀の社交空間では、「功（*mérite*）」に対する「恩恵（*grâce*）」と、さらにこの「恩恵」に対する「感謝（*reconnaissance*）」という互酬的構造が成立し、それは物質的援助を媒介としてアリストテレス的意味での「有用性ゆえの友愛」へと傾斜しうる。ルソーはまさにこの互酬性の構造に潜む道徳的危うさを問題化する。

分析にあたっては、ジャン＝フランソワ・ペランだけでなく、アントワーヌ・リルティをはじめとする *honnêteté* に関する歴史学的先行研究に依拠しながら、書簡592で一度だけ用いられる *honnêteté* の語の位置と機能を精査する。そこで浮かび上がるのは、社交的適合性としての徳と、規範に対する誠実さとしての徳との分岐である。

以上より、本報告は、ルソーが *honnêteté* に見たものが社交的徳の理想そのものではなく、むしろ徳に基づく友愛を脅かしかねない互酬的社会関係の構造であったことを示す。

第 1 日 6 月 27 日（土）10:10-10:55

会場：F305

神・金・力

——官房学と世俗化の問題——

大林 侑平（三重大学）

司会：紫垣 聡（大阪大学）

近世史家ヨハネス・ブルクハルトが述べたように初期近代は「戦争の凝集」した時代であった。戦争に駆り立てる資源収奪や戦費調達の可能性の追求は、植民地戦争や奴隷交易、そして重商主義政策や官房学の成立を要請し、翻ってこれらが「戦争の凝集」を支えたという。しかもこれが国家の安定化の必要から生じたというのが彼のテーゼである。この思想的裏付けは、17 世紀に台頭した国家理性論が戦争を国家にとって最重要の支配の手段であるとしたこと、あるいは自然法論が正戦を定め、暴力の調停と行使の権限を主権者の足元に置いたことにある。

ここにあるのは「神・金・力」の結びつきである。この三つ組は端的に、宮廷経済の要素そのものである。この時代のよくある言い回しに従うならば、聖書時代から系譜を見出されること、そして「戦時にも平時にも」「共益（＝国家）」に役立つこと、これこそが宮廷経済の正当性を示すのである。それゆえ悲惨な戦争は絢爛な儀礼と対をなす。その限りでこの背後には宗教が控え、この前景には拡張し始めた市場経済が押し出されている。

本発表では以上の理解を踏まえ、第一の課題として、初期近代のプロテスタント圏ドイツの言説に集中し、最初に、国家形成の過程における官房学の役割を検討する。なぜなら官房学は「神・金・力」の結びつきを見る上で核となる議論を提示すると同時に、その内実が宮廷と不可分の初期啓蒙の学問文化の連動のなかで形成された学問であるからである。

さらに本発表は「神・金・力」の三つ組が、1700 年前後の言説にどのような形で見出されるかを明らかにすべく、テキストの範囲を広げ、バロックから初期啓蒙の時期の議論や文芸作品を一つの視点から扱う。第一に扱うのはローガウからゴットシェート夫妻までの文学テキスト。第二に貴族教育を扱った騎士アカデミー論や家庭教師の手引書。第三にゼッケンドルフの君主鑑やバロックから初期啓蒙の時期までの官房学的テキスト。第四にクリスティアン・トマーゾスやホイマンなどの初期啓蒙の政治論。こうして以上のテキストから 1700 年前後で、「神・金・力」をめぐる様々な言説がいかに変化したかを浮き彫りにし、官房学を軸に世俗化のテーゼを検討すること、これが第二の、そして本発表の主要な課題である。

第1日 6月27日（土）11:05-11:50

会場：F304

自由論題報告（2）

コンディヤック記号論の発展史的解釈

水野 友晴

司会：馬場 朗（東京女子大学）

本発表の目的は、コンディヤック記号論の発展史的解釈を試みることである。従来、コンディヤックの記号論に関して、前期著作『人間認識起源論』（以下『起源論』）の記号区分や言語習得の議論が主に論及され、後期著作『文法』『論理学』の記号論はこれと連続的に理解されてきた。しかし、近年注目されているように、コンディヤックは、後期著作において、『起源論』の記号論を変更している。本発表の見立てでは、この変更は『起源論』で抱えた「感覚主義と記号の恣意性の相容れなさ」を解消するための改訂である。

本研究は、改訂の契機として、(1)自然的記号の身分変更、(2)記号の恣意性の放棄、(3)実践的認識／理論的認識の区分の3つに着目する。コンディヤックは元来『起源論』において、偶然的記号・自然的記号・恣意的記号という記号の三区分別を採用していた。また、彼は、人間の扱う記号が、無意図的な使用に留まる自然的記号から、意図的な使用が可能である恣意的記号へと移行すると主張することで、人間の言語習得を説明した。本発表は、(1)について、クラメル宛書簡に現れる「自然的記号は本来の意味で記号ではない」というコンディヤックの主張に着目したうえで、自然的記号の概念的な曖昧さを指摘し、言語習得の過程を、自然的記号から恣意的記号への移行ではなく、偶然的記号から恣意的記号への移行と読み替えることを提案する。(2)について、コンディヤックは、『文法』において、「恣意的記号は理解されない」と主張することで、恣意的記号を放棄し、新たに人工的記号を採用する。本発表は、文字通りコンディヤックは恣意的記号を放棄していると解釈し、この変更と後期思想の「徹底した感覚主義」との接続を図る。(3)について、コンディヤックは、思想の転換点の著作『感覚論』の中で、言語的な認識である理論的認識と非言語的な認識である実践的認識を分け、認識の成立に関する言語の決定的役割を明示する。本発表は、この区分が『文法』にも現れることを指摘し、人工的記号が思考についての思考の成立の条件であることを指摘する。本発表は、最終的に、コンディヤックは、3つの契機を経て、「感覚主義と記号の恣意性の相容れなさ」に対し、記号の恣意性を排することで、徹底した感覚主義に見合った記号論を構築しえたと結論づける。

第 1 日 6 月 27 日（土）11:05-11:50

会場：F305

メアリー・トフト事件におけるパンフレット出版——政治風刺と出版業者の視点から

藤木 明日香（東京大学大学院）

司会：原田 範行（慶應義塾大学）

1726 年、イングランドにおいて、「ゴダルミン村の女性メアリー・トフトがウサギを出産した」というニュースが世間を騒がせた。彼女を診察するために同時代最高峰の医師たちが派遣され、新聞は連日事件を報道したが、やがてウサギの出産が虚偽であったことが露呈し、トフトは投獄され事件は収束していく。本報告は、新聞報道の加熱やパンフレットの出版ラッシュを引き起こしたメアリー・トフト事件について、この事件が同時代の社会においてどのような意味を持っていたのかを明らかにし、それを踏まえて 18 世紀イングランドの出版文化の中でスキャンダルがどのように扱われていたのかという問題について考察することを目的とする。多くの先行研究では、この事件は産科学の発展や身体に関する思想史の文脈で語られてきたが、ハーヴェイによる 2020 年の研究はトフト事件を同時代の実社会の中に位置付け、フェミニズム的観点を取り入れつつメアリー・トフトを取り巻く 18 世紀社会について論じている。本報告では、こうした流れを汲みトフト事件の社会的位置付けを考察した上で、先行研究では取り扱われてこなかった視点からトフト事件に関連するパンフレットを分析することによって、従来とは異なる意味づけを試みる。この分析とは第一に、トフト事件に関するパンフレットの政治的観点からの分析、第二に、これらのパンフレットを出版した出版業者に関しての分析である。トフト事件の際に出版されたパンフレットの中には、トフトを診察した産科医たちに対する風刺表現を含むものが多数見られる。これらの表現を分析した結果、ここで用いられている風刺表現の中には同時代におけるホイッグ批判および宮廷批判の文脈に沿っているものが見られた。実際にトフト事件に関わった医師たちはホイッグであり、トフト事件は現政権および宮廷批判の格好の材料として利用されたことがわかる。さらに、ECCO を用いてこれらのパンフレットの出版業者の活動年数、出版件数、出版内容の分析を行った。その結果、トフト事件の際に出版したパンフレットはこれらの出版業者にとって普段の出版活動の延長上に位置付けられるものであり、その分野の実績を積んできた出版業者たちが事件の話題性を利用するために迅速に対応したものであると結論づけた。このように、安価かつ迅速な出版が可能なパンフレットが、スキャンダルを利用して自らの主張を發表することを望んだ作者たちによって選択され、それに対応するだけの設備や実績をもつ出版業者たちがそれを実現させたことによって生まれた出版ラッシュは、18 世紀前半の出版文化におけるスキャンダルの扱われ方の事例として注目に値するものであると考えられる。

第1日 6月27日（土）12:50-13:35

会場：F304

自由論題報告（3）

『新エロイーズ』における父娘の近親相姦的な描写
——愛情と恥じらい、愛着と血縁、母親の視線——

今野 友梨香（ソルボンヌ大学大学院）

司会：齋藤 山人（日本大学）

18世紀において、多様な領域の中で絶えず革新的な思考を生み出し続けてきたジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の作品の中で、家族という主題は重要な位置を占めている。たとえば、文化人類学や政治学の領域に関して言えば、彼は『社会契約論』（1762）や『人間不平等起源論』（1755）の中で、家族というものを「あらゆる社会のなかで、もっとも古く、そして唯一の自然な」「緊密な小さな社会」として提示している。いわば、家族はこの社会全体の原点である。教育学の領域においても、ルソーは『エミール』（1762）の中で、家族の主題を中心に扱いつつ、自身の思い描く子どもの理想的な教育方法によって、一人の乳幼児エミールが自立した一国民として国家への政治参加が可能になるまでの成長過程を描いている。その他にも、ルソーは『ダランベールへの手紙』（1758）の中で、政治体の内部における理想的な習俗の形成を家族の主題と密接に関連づけており、『告白』（1782）では、血縁のある親子だけでなく、血縁を持たない概念的な親子関係にも言及している。

同様に、当時多くの人々を熱狂の渦に巻き込んだルソーの書簡体小説『新エロイーズ』（1761）では、彼の他の作品の中で展開されている家族についての言説が至るところに内包されている。実際に、作中のみならず、この作品の『第二の序文』の中でも、彼は公共の習俗に対する家族の影響力の強さに言及している。

このように、彼の作品全体において家族は重要な主題であり、これまで多くの先行研究が、彼のあらゆる著作における家族についての分析を重ねてきた。その一方で、この主題と関連の深い近親相姦の主題に関して言えば、作品ごとに分析の度合いにばらつきがあると言える。特に、『新エロイーズ』におけるこの主題についての研究は十分とは言い難い。しかしながら、注意深く分析を重ねれば、この小説において、近親相姦の主題が重要な主題と複雑に絡み合いながら描かれているということを確認することができるだろう。

本発表では、とりわけジュリと彼女の両親からなる親子関係に注目し、この父娘の関係性における近親相姦的とも言える描写を分析する。その際、関係性の構成要素としての「愛情(amour)」と「愛着(attachement)」の違いに注目し、それらの要素における「恥じらい(pudeur)」や血縁の概念の重要性についても言及しよう。さらに、父娘の様子を見つめる母親の存在にも目を向け、フロイトのエディプス・コンプレックスとの関連性についても検討することにしよう。また、分析の際には、これらの要素と関連の深い『告白』における母親の喪失をめぐる幼少期のルソーと父親の関係性についても言及することにしたい。

第 1 日 6 月 27 日（土）12:50-13:35

会場：F305

『トリストラム・シャンディ』とラティチューディナリアニズム
——信仰と懐疑主義をめぐる——

中地 拓馬（東京大学大学院）

司会：内田 勝（岐阜大学）

本発表はローレンス・スターン（1713-1768）の小説『トリストラム・シャンディ』（The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman, 1759-1767）に対するラティチューディナリアニズム（Latitudinarianism）の影響を認識論の枠組みで検討したうえで、18 世紀における信仰と道德の問題の中で把握することを目的とする。ラティチューディナリアニズムは、17 世紀後半にイングランド国教会内の穏健派の聖職者たちによって展開された宗教思想で、カトリックの権威主義とピューリタニズムの信仰における個人主義の両方を狂信と批判し、神が創造した自然を認識するものとしての理性と、神の真理が直接表現された啓示としての聖書を信仰の根拠とすることを説いた。理性と聖書の関係は、神が人間に与えたが原罪によって墮落した理性の認識能力の限界を聖書が克服するという形で理解された。ここでは理性に絶対的な権威が与えられておらず、その意味でこの思想は懐疑主義の一種と見なすことができる。

国教会の聖職者でもあったスターンは、ラティチューディナリアニズムの影響を強く受けていると考えられている。実際、彼が聖職者として世に送り出したものの、剽窃の多さでかえって悪名高い説教集『ヨリック氏説教集』（The Sermons of Mr. Yorick, 1760-1766）において、その最大の参照元の一つがラティチューディナリアニズムの説教であることが明らかになっている。参照元が明らかになっていない箇所でもこの思想から大きく逸脱する内容は含まれていない。この事実から『トリストラム・シャンディ』も一定の影響を受けているという評価がされている。ただし、懐疑主義的認識論が、唯一の解釈だけが支配的になるような事態を拒絶し読者を宙づりにするトリストラムの語りの背景にあるという点では先行研究の見解は一致するものの、一方でその懐疑主義が信仰に関係するかどうか、言い換えれば最終的に人間の理性を過信することを戒め、信仰に至る道を読者に選択させるためのものであるのかどうかについては意見が分かれている。

本発表の第一の目的は、ラティチューディナリアニズムの認識論における「意見(opinion)」という語の意味に注目して、『トリストラム・シャンディ』を「意見」についての小説として読解し、小説がこれまで考えられていた以上に懐疑主義を中心的な主題として構成されることを明らかにする。第二の目的は、先行する研究が作品に表された道德観を、作品が信仰に読者を導きうることの根拠としている点を批判することである。これを踏まえて、『トリストラム・シャンディ』を道德と信仰をめぐる 18 世紀の大きな枠組みの中でとらえることができるかどうかを考えたい。

第 1 日 6 月 27 日（土）13:45-14:30

会場：F304

自由論題報告（4）

『百科全書』とデュ・シャトレ『物理学教程』
——ライプニッツ＝ヴォルフ哲学を中心に——

小泉 幸太（東京都立大学大学院）

司会：川村 文重（慶應義塾大学）

啓蒙時代の知の集大成『百科全書』は、各項目の明示・暗示的な引用構造、有機的な参照ネットワークによって複雑な多声構造を有し、直接の項目執筆者だけでない多数の人物が多様な形式に関わった巨大な共作物である。同書への女性の参与は極めて限定的とされるが、フランスの女性哲学者エミリー・デュ・シャトレが、その主著『物理学教程』を通して『百科全書』に大きな痕跡を残していることはあまり知られていない。本発表の目的は、『物理学教程』の思想が『百科全書』に如何に組み込まれているかを明らかにすることである。

両テキストを繋ぐ結節点はサミュエル・フォルメによる私家版哲学辞典である。当辞典の原稿は『百科全書』の重要な情報源となっているが、フォルメはその執筆時にデュ・シャトレの『物理学教程』を相当に参照したことが近年の研究で明らかになっている。K. Maglo の研究はその嚆矢であり、『物理学教程』への明示参照のある項目を 7 つ挙げ、そのうちの「仮説」「空間」「時間」などを分析して、デュ・シャトレ独自の科学哲学思想が『百科全書』に統合されていることを論証した。ARTFL『百科全書』デジタル版の編集を務めた G. Roe は、両著作のテキスト類似度をシーケンスアラインメント手法で計算し、典拠記載の無い引用を含む項目 6 つを新たに同定した。

本報告ではまず、Maglo と Roe が挙げた『物理学教程』引用項目のうち、とりわけライプニッツ＝ヴォルフ哲学の影響を受けたデュ・シャトレ形而上学に強く関わる項目「矛盾」「充足理由」「連続性の法則」の 3 項目を中心に抜き出し、『物理学教程』が『百科全書』において如何に利用されているかを検討する。加えて、先行研究では言及されていないライプニッツ＝ヴォルフ哲学関連記事「本質」「属性」「様態」など複数項目を『物理学教程』と比較することで、その類似点と相違点を精査する。こうした調査によって、『百科全書』のライプニッツ＝ヴォルフ哲学の最も根幹の形而上学項目が、フォルメを媒介して『物理学教程』のほぼそのままの借用から成り立つこと、そしてその一方で、『百科全書』における他のライプニッツ＝ヴォルフ哲学関連項目が、『物理学教程』においてロック批判を展開したデュ・シャトレの思考と対照的に、より経験主義的色彩の強いことが明らかになる。

第 1 日 6 月 27 日（土）13:45-14:30

会場：F305

ジェームス・マッキントッシュの見たフランス革命：1791～1815

岡本 侑樹（東京大学大学院）

司会：楠田 悠貴（立命館大学）

本研究は、ジェームス・マッキントッシュ（Sir James Mackintosh, 1765–1832）による 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのフランス革命評に焦点を当てる。スコットランド出身のホイッグ政治家・哲学者・法律家であったマッキントッシュは、スコットランド啓蒙が隆盛した 18 世紀後半と、近代リベラリズムが確立される 19 世紀前半とを架橋する思想家として位置づけられる。しかし、我が国においては、その政治思想に対する本格的検討は必ずしも十分とはいえない。

本発表では、彼が論壇に登場する契機となった『フランス擁護論』（*Vindiciae Gallicae*, 1791）から、1815 年に『エディンバラ・レビュー』（*Edinburgh Review*）に発表した著作に至るまでの議論を対象に、その思想的展開を検討する。焦点は二点にある。第一に、政治的急進主義から一般的には距離を置くとされるスコットランド啓蒙、とりわけデイヴィッド・ヒュームの影響を受けていたマッキントッシュが、なぜ革命の理念を擁護し、エドモンド・バークを批判したのかという問題である。第二に、彼が 18 世紀英国・スコットランドで確立された思考枠組みを応用しつつ、フランス革命からナポレオン戦争期に至る政治的混乱をいかに分析したのかという点である。

そうした検討の結果、マッキントッシュはヒュームの「意見」概念と、歴史理論を鍵として、記述的な政治分析と規範的な政治理論、ひいては経験主義的理論の特殊性と規範的理論の普遍性を架橋し得る可能性を見出していたことが明らかとなる。しかし、革命の混乱とナポレオン戦争の展開を前にして、「意見」が自由な政治制度へと直線的に収束するとは限らないという認識へと到達する。本発表は、こうした思想的軌跡の考察を通じて、スコットランド啓蒙思想史の研究のみならず、現在岐路に立たされるリベラル・デモクラシー一般についても考察を深める糸口を提供することを試みたものでもある。

第1日 6月27日（土）14:40-15:25

会場：F304

自由論題報告（5）

説得するジュスティーヌ

——サド『美德の不幸』における対話のあり方——

淵田 仁（城西大学）

司会：鈴木 球子（信州大学）

本報告では、マルキ・ド・サドによる『ジュスティーヌまたは美德の不幸』（1791年、この物語は三度書かれ、本作は二番目のものである）を分析の対象とし、主人公ジュスティーヌとリベルタンたちの対話に着目しながら、彼女の言語的抵抗がリベルタンの言説をパロディ化していることを明らかにする。

サドの作品世界に登場する女性は二種類に区別することができる。一つ目がジュリエット（『ジュリエット物語』）やウージェニー（『閨房哲学』）に代表されるリベルタンたちに素養を見出され教化される「リベルティーヌに成る女性たち」である。もう一つが今回議論の中心に据えるジュスティーヌに代表される不遇の女性である。彼女は物語の最初から最後までリベルティーヌに成ることはなく、反復的な暴力の犠牲者たちである。しかし逆の見方をすれば、彼女はリベルタンたちが教化できない存在でもある、ということもできる。事実、ジュスティーヌは暴力に弄ばれるだけの犠牲者ではない。事あるごとに彼女はリベルタンの主張に反駁し、彼らを有徳の世界へ連れ戻そうと説得を試みる。

ジュスティーヌをめぐるのは、ボーヴォワールやアンジェラ・カーターのフェミニズム的解釈が注目に値する。これらの解釈は、ジュリエットを伝統的女性像を打破しようと（限定的ではあるが）評価する一方で、ジュスティーヌを家父長的規範を内面化し、受動的な美德を守ることで自らを被害者に仕立て上げる男性の「共犯者」としてみなしていた。つまり、美德こそが女性を無力化する装置であり、その現実に対して頑なに無知であり続ける者として、ジュスティーヌは批判的に捉えられていた。

本報告では、こうしたフェミニズム的解釈に対して、別の評価軸からジュスティーヌの形象を検討する。彼女の抵抗を単なる無垢性や無知と見なすのではなく、彼女が1791年版において保持していた「語り手」としての特権性は、リベルタンの論理的完結性を攪乱し、彼らを「対話」の場に引きずり出す力を持っていた。彼女の真剣な反駁がリベルタンに過剰な自己正当化を強いることで、彼らの言説は読者の前で逆説的にパロディ化されるのである。かつてフーコーはサドのエクリチュールが他者の説得を目指すものではないと指摘していたが、そうした特質は『美德の不幸』の改作を通じてジュスティーヌを抑圧し、沈黙させることで初めて達成されるといえるだろう。

第 1 日 6 月 27 日（土）14:40-15:25

会場：F305

番号を振りながら書く

——ドイツ初期ロマン派の思索ノートと人文主義の筆記法——

二藤 拓人（西南学院大学）

司会：桑原 俊介（東京大学）

アン・ブレアは *Too Much to Know*（2010）において、初期近代ヨーロッパにおける「書物の氾濫」に対処するために発達した手稿本や印刷本による大規模な編纂事業と、そこで実践された文書情報の管理術について歴史的に考証し、抄録や要約、索引・文献目録の編成を通じたノート作成が学知の組織化を支える重要な文化技術であったことを示した。さらにデキュルトは、こうした人文主義的な読書・抄録術（Lese- und Exzerpierungskunst）の伝統が、ヴィンケルマン、ヘルダー、リヒテンベルクといった、膨大なノートを遺した初期啓蒙期の学者たちに継承されていることを論じている（Décultot 2014）。

発表者の関心は、この筆記法の系譜を 18 世紀末の初期ロマン派へと接続することにある。発表者の見立てでは、彼らが独自に発案したとされるアフォリズム風の「断章」表現もまた—それが偶然や論理の跳躍を許容する思索形態であるにもかかわらず—実際の筆記過程においては、書き出された内容を整理・編集し、参照構造を形成する操作と無関係ではない。例えばフリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）の思索ノートでは、術語や概念が複雑に結び付く断章群のなかにあって、語句への下線が手稿紙面上で暫定的なトピックを形成し、後続の筆記を方向づけながら、着想を相互に関連付ける役割を担っていた（二藤 2022）。

本発表では、下線とは異なる操作記号として、アフォリズムの産出過程でしばしば確認される通し番号の役割に着目する。具体的には、シュライアーマッハ（1768-1834）とノヴァーリス（1772-1801）の思索ノートを手掛かりに、番号が着想同士の切れ目を明示し、個々の着想を区分・配列するだけでなく、紙面上における思考の操作符としても機能していることを示す。まず、ヴィンケルマンの遺稿「抜粋集」の紙面構成を、抄録術の典型であるコレクタネアの技法との関連で分析し、同様の体裁をもつノートとして、シュライアーマッハによるアリストテレス『政治学』の覚書（1793/94）や一連の手帳「着想集」（ca. 1796）に焦点を当てる。そこで通し番号が特定の着想への横断的な参照（„vide 112“）や追記（„ad 61“）を容易にしている点を例証する。続いてノヴァーリスの遺稿「テプリッツ断章群」（1798）では、各断章に振られた通し番号が、特定の着想へと思考を立ち返らせる指標として働き、当該断章の主題を反復・進展させている局面を取り上げる。

こうした手稿資料の精査を通じて、雑多な文章群に番号を付すという慣習が、学知の組織化を志向する情報管理術から初期ロマン派の断章的書記にまで続く文化実践であることを明らかにする。

第1日 6月27日（土）15:35-16:20

会場：F304

自由論題報告（6）

宗教教育の転換点としてのルソー
——教会批判から近代的教育観の形成へ——

福永 暁斗（九州大学大学院・日本学術振興会特別研究員）

司会：飯田 賢穂（筑波大学）

本報告では、ルソーの教育論において、当時ヨーロッパで支配的であったキリスト教と子どもの教育との関係がどのように論じられているかを確認し、ルソーが唱える独自の宗教教育論の特性を明らかにする。とりわけ『エミール』第四篇に記される宗教教育の具体的な指導法に焦点をあてることで、ルソーが子どもに宗教を学ばせる際に、大人が思想を押し付けるのではなく、子ども自身が宗教について主体的に学ぶことができるように説いている点を明らかにしたい。さらに、子どもの主体性を全面的に認めようとする、当時としては革新的なルソーの宗教教育論に注目して、このようなルソーの論が、近代的な教育観が生じていく過程（教会が子どもに道徳や真理のあり方を一方的に規定する教育から、宗教が絶対的なものではなく、子どもの精神の自由が認められるような教育へと移り変わろうとするなか）で、いかなる役割を果たしたのかについても考察していくことを目指す。従来の研究は、ルソーの思想を論じるにあたって、文学や哲学の分野はルソーの宗教観に注目し、教育学の分野は彼の教育観に関心を寄せるといったように、細分化して研究を進めてきた。これに対して本研究は、文学や教育学の分野を横断的に研究していくことで、これまで注視されることが少なかったルソーの宗教教育論について考察を深めるとともに、様々な論考が近代思想の先駆けとして評価されてきたルソーを、宗教教育の観点からも近代に先立つ独創的な論を展開した作家として新たに位置づけることが可能であるかを吟味するものである。

ルソーは『エミール』のなかで、教会がおこなう子どもに信仰を押しつける宗教教育を厳しく非難し、これが原因となってパリ大司教クリストフ・ド・ボーモンから『教書』により断罪された。しかし、ルソーは『ボーモンへの手紙』を示して、自身の宗教観と教育観の正当性を教会に訴える。本報告はまず、この反駁をみていくことで、当時不動のものとされてきた教会の教育に批判を加えた思想家として、ルソーを捉えていく。そのうえで『エミール』に記されたルソーの宗教教育論に注目して、子どもはキリスト教の支配を逃れて自由に宗教を選ぶことが可能だと彼が提唱したことを明らかにし、フランス文学史上あるいは教育思想史上における宗教教育の〈転換点〉としてルソーを位置づけることを試みる。加えて、ルソーの説く宗教教育論が、当時の読者・社会に与えた影響を探り、18世紀末のフランスで変容していく宗教観や教育観とルソーの思想との関連について考察していきたい。

第1日 6月27日（土）15:35-16:20

会場：F305

微笑みと熱い涙——モーゼス・メンデルスゾーン『フェードン』における混合感情

秋元 陽平（ジュネーヴ大学大学院）

司会：杉山 卓史（京都大学）

ユダヤ人の啓蒙哲学者モーゼス・メンデルスゾーン（1729-1786）は近年、魂の認識において対象への不快が対象の表象がもたらす快によって二重化されることを論じたいわゆる混合感情論によって、カント『判断力批判』への地ならしという従来の位置づけを超えたその独自の美学的貢献を研究者たちによって評価されつつある。

ところで、彼は同時代のヨーロッパではむしろ、彼自身の哲学を反映させた内容の改変を多分に含んだプラトンの対話篇のドイツ語訳『フェードン』（1767）の成功によって知られていた。このベストセラーは彼の混合感情論が展開された『ラプソディ』の第一版と第二版（1761/1771）の出版時期をまたいで仕上げられたのだから、美学の文脈で言及されることの少ない『フェードン』にも、混合感情論の反響は見いだせるのではないだろうか？本発表はこの仮説を出発点とする。

第一に、プラトンの原作『パイドン』には、混合感情に関係する描写が少なくとも前半に二つ登場する。一つは囚われのソクラテスが、鎖につながれた足の痒みに言及しながら、身体における快と苦の不可分性を主張する場面である。もう一つはパイドン（フェードン）が、若い友人たちが皆、敬愛する哲学者の差し迫った死を目前にして「快と苦が入り交じった、今までにない経験したことのない感情」を経験したと述懐する場面である。メンデルスゾーンは自身の翻案において、これら両方の場面についてそれぞれ一定の留保や付け加え、改変を施しているが、『フェードン』がメンデルスゾーンにおけるライプニッツ哲学の変奏という側面を持つことを踏まえた上で、その意義を考えなくてはならない。

第二に、『フェードン』のうちメンデルスゾーン自身の自由な思想展開が見られる後半部分において、ソクラテスは美的陶冶を通じた現世における自己完成と社会への貢献について若者たちに語るが、彼はこうした徳は人生に「メランコリーと喜び」を振りまくと語る。『ラプソディ』の混合感情論に照らすことで、プラトン『パイドン』の靈魂不滅論からメンデルスゾーンが何を引き出したのかを考える余地がある。

最後に、メンデルスゾーンの美学理論が、『フェードン』との連関において（否定的に）受容された例として、フランス生気論の旗手 J-P・バルテズの『美の理論』（1807）を検討する。

第1日 6月27日（土）16:30-17:15

会場：F304

自由論題報告（7）

**アングロマニーにしてルソーの愛読者？
——ネッケルの思想的背景とジュネーヴ人ネットワーク——**

安藤 裕介（立教大学）

司会：永見 瑞木（大阪公立大学）

ジャック・ネッケル（1732 - 1804年）は、ジュネーヴ出身のプロテスタントでありながら、カトリック君主国のフランスで三度にわたって財務長官の職を務めた。その政治経済思想には、イギリスの政治文化の影響とルソーの思想のいくらかの要素が複雑な形で入り混じっている。本報告では、こうした彼の政治経済思想の知的背景について、ネッケルが享受したと思われるその知的な交流関係、とりわけジュネーヴ人ネットワークという観点から可能な限り明らかにしてみたい。

ネッケルは1760 - 70年代の間に試みられた穀物取引の自由化において、これを主導したフィジオクラットらの理論に公然と反対したことで知られる。その際に彼が強調したのは、時間をかけて社会が蓄積した経験的知恵の重要性であり、これを特定の人間が理性の力のみで築いた抽象的原理と対照させた。このような思考方法は社会秩序の時効的作用を重んじるヒュームやバークの思想と強く呼応するものがある。また、フランス革命期のネッケルはイギリス型の立憲君主政を称賛し、革命の暴力的急進化を避けるためにも名誉革命の経験に倣うべきだと主張した。こうしたアングロマニー（英国かぶれ）の態度を示す一方で、土地の所有権や文明社会をめぐる彼の分析にはルソーの思想的片鱗も少なからず見受けられる。このような複雑な性格をもった彼の政治経済思想はどのようにして形成されたのであろうか。

ネッケルの享受し得た知的背景に目をやるならば、彼はジュネーヴ人プロテスタント銀行家の代表格としてイギリスの政治家や知識人たちと一定の交友関係を築いており、同時にその夫人シュザンヌはルソーの親友にして同郷人であるポール・ムルトゥと生涯にわたる友情を結んだことで知られる。さらにここには、ネッケルの秘書にしてルソーの支援者でもあったフランソワ・コワンデ、シュザンヌの元恋人エドワード・ギボンらの人脈も絡んでくる。また、ネッケル自身がルソーに宛てた手紙や娘のジェルメーヌ（スタール夫人）が残した『ジャン＝ジャック・ルソーの作品と性格をめぐる書簡』からも、ネッケル一家がこのジュネーヴの哲学者とかなり近い距離にいたことが見えてくるであろう。

一方でイギリス国制の賛美者でありながら、他方でルソーの愛読者でもあったこの奇妙で興味深いネッケルの知的背景について伝記的な手法でアプローチしたい。

第 1 日 6 月 27 日（土）16:30-17:15

会場：F305

18 世紀後半のイギリスにおける心理的成長の象徴としてのチューリップと薔薇

——植物学とウルストンクラフトの『実生活実話集』——

野村 梨咲子（オレゴン州立大学大学院）

司会：小川 公代（上智大学）

本発表は、メアリ・ウルストンクラフト（1759–1797）の『実生活実話集』（Original Stories from Real Life, 1788）における女性の心理的成長についての植物学的表現を分析する。特に第七章（“Virtue the Soul of Beauty.—The Tulip and the Rose.—The Nightingale.—External Ornaments.—Characters.”）で顕著に見られるチューリップと薔薇の描写に着目し、ウルストンクラフトの女性の外見や美德に対する考えを明らかにすることを目的とする。

Sam George など、植物学と 18 世紀後半のイギリス人女性作家の関係性を関心とする研究者は、『実生活実話集』におけるウルストンクラフトのチューリップに対する批判的な意見と 17 世紀のオランダで起こったチューリップ・バブルの繋がりを示した。本発表では、このような先行研究をもとにチューリップが美德に欠ける女性の表面的な美しさを表す象徴として用いられた理由を検討する。具体的には、チューリップ・バブルにおいて最も価値があるとされたセンプー・オーガスタス（Semper Augustus）の赤と白の美しい縞模様は、チューリップモザイクウイルスの感染によって生じていたため、美しい見た目とは裏腹に病的であったことが虚飾に満ちた女性をチューリップに例える表現と関係していると考えられる。その一例として、アレキサンダー・ポープ（1688–1744）の「ある婦人への手紙」（“Epistle II: To a Lady on the Characters of Women,” 1735）においても、女性の行動の矛盾が縞模様のあるチューリップに例えられていることが挙げられる。さらにウルストンクラフトは、作品内で天然痘に感染し美しさを失った少女が病をきっかけとして外見を気にする代わりに教養を身につけ、美德を養うことができたという話をする中で天然痘ウイルスとチューリップモザイクウイルスを対比している。

また 18 世紀のイギリスでは、植物の美しさに重きを置く花飾学（floristry）においてチューリップ等の外来種が重宝される傾向にあったが、科学的に植物を理解する植物学（botany）においては外来種より在来種である薔薇等の植物の方が既存の研究によって分類されやすいことから、重要視されていた。さらにチューリップ・バブル以降、チューリップがオランダを表す花として捉えられるようになったように薔薇はイギリスの象徴と考えられていた。そのため、作品内でもチューリップの美しさはすぐに失われることが強調されているのに対し、薔薇は枯れて美しい見た目を失った後も豊かな香りで人々を魅了し続ける様子が描写されている。本発表は、このように 18 世紀における植物学の発展や国の特徴についての植物学的表現に着目することでウルストンクラフトが薔薇を美しいだけではなく、理性的で洗練されている花として描写し、女性の理想的な成長の象徴として扱う理由を考察する。

第1日 6月27日（土） 17:45-18:45

会場：関西学院会館・風の間

レクチャー・コンサート

18世紀の舞踏譜にみる空間と身体

レクチャー：木村 遥（成城大学）

貝田 かなえ（関西学院大学大学院）

舞踊・演奏：樋口 裕子（バロック・ダンス）

有門 奈緒子（バロック・ダンス）

大内山 薫（バロック・ヴァイオリン）

共催：関西学院大学文学部美学芸術学研究室

舞踏譜は、舞踊における身体動作を記録・伝達する手段であると同時に、舞踊家の動きを空間のなかに位置づけるための体系として発展した。とりわけ、舞踏教師フイエ Raoul-Auger Feuillet (c.1660–1710) が著した『コレグラフィエ』(c. 1700) は、1706年の英訳出版を契機にヨーロッパ全土へ広く流布し、18世紀の舞踊実践に大きな影響を与えたことで知られる。

本来、舞踊と舞曲は不可分であり、身体動作と音楽は相互に密接な関係をもつ。しかし、舞曲が舞踊の実践から切り離され、独立した音楽作品として作曲・演奏されるようになると、それまで自明とされていた身体動作と音楽の連関は見えにくくなる。舞曲を音楽作品として扱う視点の普及は、当初その前提にあった身体性の看過を招いているといえるかもしれない。

本企画では、バロック・ダンスに樋口裕子氏ならびに有門奈緒子氏、バロック・ヴァイオリンに大内山薫氏をお招きし、舞踏譜が可視化する「空間に位置づけられた身体」、および舞踊と音楽の相互関係について検討する。まず舞踏譜の成立史について解説したのち、フイエに端を発する18世紀に出版された舞踏譜に基づく舞踊と演奏（メヌエット、ミュゼット等を予定）を実演する。さらに、実践者から見た音楽と舞踊の関係性について、対談形式で議論する。これらを通じて、18世紀の舞曲に内在する身体性と空間性、舞踊と音楽の関係をあらためて捉え直す契機としたい。

第2日 6月28日（日）10:00-10:45

会場：F304

自由論題報告（8）

フィロゾフ・アラモード

——1720年のイエズス会学校演劇における哲学者とその家族——

貝原 伴寛（早稲田大学）

司会；増田 都希（東海大学）

「哲学者」を指すフランス語の単語「フィロゾフ」が、18世紀に特別な意味を獲得したことはよく知られている。端的に言えば、現在は「啓蒙思想家」と呼ばれる開明派の知識人を指す言葉として使われたのであった。哲学者と言え、一般には俗世を離れて真理を探究する者のイメージが持たれるところだが、啓蒙期のフィロゾフにはむしろ社会参加的な姿勢が期待された。サロンで積極的に社交し、会話と討論によって知識を洗練させ、それを生活の改善に役立てるべく積極的に社会に参画する態度こそが、啓蒙哲学者のエートスだというわけである。

こうした理念において、「哲学者」は古典に関する知識の有無よりも、生活態度により規定されるものとされた。例えば劇作家スデーヌのヒット作『我知らず哲学者』（1765）では、哲学の専門的な知識を持たずとも立派な理性を備えた商人が、真の「哲学者」として称揚されている。社会から背を向けて無用の学問に耽る者より、学識に欠けても実際的な判断力を有する生活者の方が優れているというわけである。本報告で注目したいのは、こうした新たな「哲学者」が、しばしば家族愛に満ちた家父長として描かれたことである。スデーヌの描く商人はまさにそうした人物であった。近年の研究では、ラヴォワジエなど実在の学者を事例に、啓蒙期の男性知識人が、妻子を愛する家庭人としての自己像を提示していたことが示されている（Meghan Roberts, *Sentimental Savants*, 2016 など）。

啓蒙文化を特徴づける「哲学者」の研究に家族史や男性史の視点を取り入れる以上の研究動向を踏まえ、本報告では、イエズス会が運営するルイ大王学院で1720年に上演された喜劇『流行りの哲学者』（*Le Philosophe à la mode*）を論じる。同作は月刊誌『メルキュール』に紹介記事が掲載されたものの、それ自体は未刊行に留まった作品で、知名度は低いが、「哲学者」風刺の先駆としてアイラ・ウェイドに注目された、歴史的には興味深い作品である（Ira O. Wade, *The "Philosophe" in the French Drama of the Eighteenth Century*, 1926）。ウェイドは『メルキュール』の記事に依拠して、同作をイエズス会の反啓蒙的な態度の発露として解釈するに留まった。本報告では、フランスに現存する手稿台本を用いて、内容の詳細な分析を行い、同作を知識人と家族の関係に関する歴史に位置づけてみたい。この試みを通じて、啓蒙思想の歴史を家族史に結び付けるための新たな論点を探ることが、本報告の目的である。

第2日 6月28日（日）10:00-10:45

会場：F305

**ヒューム哲学が始まる時、結ばれるところ
知的探究のリズムをめぐって**

若澤 佑典（慶應義塾大学）

司会：森 直人（高知大学）

デイヴィッド・ヒュームの知的探究は、道徳や政治といった「特定の対象をめぐる」哲学的精査のみならず、「哲学という営みそのもの」への哲学的自己精査によって、そのあり方を特徴付けている。彼の『人間本性論』がメタ哲学的視座（＝「哲学すること」についての哲学）を含むことは、例えばアネット・バイヤーやドナルド・リヴィングストン、ドン・ガレットといったヒューム研究者によって指摘されてきた。これらの知見を踏まえつつ、『人間本性論』出版以後のヒューム——哲学エッセイを書くことで、文芸界における自らの位置を確立し、本人は哲学的営みの愉快さを強調しつつも、その知的探究のラディカルさによって、社会的論争／反発を巻き起こす「文筆家」の姿——については、その「哲学をめぐる哲学」のエッセンスをどのように抽出できるだろうか。

哲学エッセイを書くヒュームは、繰り返し読者の「飽き」や「注意欠如」を危惧しつつ、すでに存在する哲学諸派のアイデアをまとめ、これを自身の言葉で言い換えながら、論点そのものの変奏を試みる。ヒューム自身は、ジョゼフ・アディソンの文芸活動を参照しつつモデル化しているように、哲学という営みはエッセイという形式によって、人間の広範囲な社会活動の一角を担う、コミュニケーション行為として位置づけられる。『人間本性論』以降のヒュームは、「哲学という営み」をさまざまな「知的系譜の編集活動」として実践している。こうした「編集行為としての哲学実践」という視座は、ヒュームによる西洋古典（＝古代ギリシア・ローマの知的遺産）の継承を論じる受容研究と、メタ哲学的なテキスト解釈を接合しうる。

本発表で提示するのは、ヒュームの知的探究が示すこうした「編集行為としての哲学実践」のすがたである。この描像において「哲学すること」のはじまりは、（自らを取り巻く）世界の多様さや複雑さへの情動的反応ではなく、世界を説明しようとする諸言説が衝突し、思考が右往左往する「行き詰まりをなんとかしよう」とする知的突貫への意志にある。この実践行為は、体系的理論の構築や、自身の立場の至上性を志向しない。むしろそこでは、探究が中断したり、逸脱したりすることが、思考の転回を促すリズムとして称揚される。ヒュームのエッセイが示す「編集行為としての哲学実践」は、硬直化したコミュニケーション空間を揺らし、捻り、開くためのことばの運動なのである。

第 2 日 6 月 28 日（日）10:55-11:40

会場：F304

自由論題報告（9）

18 世紀末における人間学の誕生とその可能性

——初期ミシェル・フーコーにおける啓蒙論と批判哲学論を中心に——

田村 海斗（東京大学大学院）

司会：渡邊 浩一（福井県立大学）

本発表では、ミシェル・フーコー（1926-1984）の初期における啓蒙期の思想家論（デイドロ、エルヴェシウス、コンディヤック）とカントの批判哲学論について分析することで、なぜ 18 世紀に人間学が誕生し得たのか、そしてフーコーにとって人間学はどのような可能性、あるいはアクチュアリティをもつ主題だったのかを考察する。

フーコーは一般的に近代以降の人間学を鋭く批判した思想家として知られてきた。たとえば、フーコーは『言葉と物』（1966）においてカントを「独断論の眠り」の代わりに「人間学の眠り」を招いた思想家として批判し、カント以降の哲学は総じてこの「人間学の眠り」を免れていないと述べている。しかしながら、『カント『人間学』序説』（1961）においてフーコーはカントの人間学とそれ以降の人間学を厳密に区別し、前者の持ち得た可能性を一定程度評価するなど、フーコーを「人間学の批判者」と位置づけることはかならずしも正当ではない。さらに、近年刊行された初期講義録である『人間学の問い』（1954-55）において、フーコーは人間学の発生に多大な関心を示しており、啓蒙主義の哲学とカントの批判哲学という文脈のなかで人間学が可能になったと述べている。フーコーはさまざまな著作で 20 世紀にいたる自身の同時代を 18 世紀末の系譜上にあると診断しているが、そうであるならば、フーコーの思想をたんなる人間学の排斥としてではなく、その可能性を正当に吟味するものであったと位置づけることが可能になるだろう。

本発表はしたがって主に『人間学の問い』と『カント『人間学』序説』を中心に取り上げながら、啓蒙主義の哲学とカントの批判哲学がいかにして人間学を可能にしたかを詳細に明らかにする。近年では両者に注目した研究も存在するが、とりわけ『人間学の問い』については概略的な紹介にとどまっている（Bremner, Sabina F. Vaccarino, 2020）。したがって本発表では『人間学の問い』を詳細に分析しつつ、両テキストの接続関係を明らかにすることで、フーコーの人間学論を立体的に浮かび上がらせる。

第 2 日 6 月 28 日（日）10:55-11:40

会場：F305

18 世紀イタリアの演劇作品に見られる母親像——古典主義を超えて

大崎 さやの（東京藝術大学）

司会：奥 香織（明治大学）

18 世紀、イタリアの文人達は文芸の改革を目指していた。フランス人等によって批判されたイタリアの文学を、フランスの古典主義文学に倣って改革しようとしたのである。その運動の中心となったのが、1690 年にローマで創設されたアルカーディア・アカデミーで、イタリア各地の支部が、詩人たちの活動拠点となっていた。本発表で取り上げる 3 人の作家、すなわちピエル・ヤーコポ・マルテッロ (Pier Jacopo Martello, 1665-1727)、シピオーネ・マッフェーイ (Scipione Maffei, 1675-1755)、カルロ・ゴルドーニ (Carlo Goldoni, 1707-1793) もアカデミーのメンバーだった。

この時代のイタリア演劇には、母親を主人公とする作品が見られるようになった。イタリアでは 16 世紀にジャンジョルジョ・トリッシノの『ソフォニスバ (イタリア語でソフォニズバ)』 (Sofonisba, 1524 年刊) のような母親が主人公の悲劇が書かれていたが、その後隆盛したコンメディア・デッラルテの喜劇では母親役は主要な役ではなくなっていた。だが 18 世紀に入り、母親が主人公として再登場してきたのである。

ボローニャの劇作家マルテッロは、エウリピデスの悲劇『アルケステイス』に基づく悲劇『アルケステイス (イタリア名アルチェステ)』 (Alceste) を執筆した。夫である王の命を救うために自らを犠牲にしようとする王妃アルケステイスの物語で、貞節な妻、また子供想いの母としてのヒロインの姿が描かれている。悲劇は 1709 年にコンメディア・デッラルテの俳優ルイーゲ・リッコボーニ (Luigi Riccoboni, 1776-1753) の一座によって初演されている。

マルテッロの悲劇の上演を推進したのが、ヴェローナの侯爵マッフェーイであった。マッフェーイは 1713 年初演の悲劇『メロペー (イタリア名メローペ)』 (La Merope) で王妃メロペーと生き別れになった息子の再会の物語を描いた。

マルテッロとマッフェーイがギリシア古典に基づく悲劇で評判を得た一方、ゴルドーニは喜劇のジャンルで母親が主人公の作品を生み出した。彼は喜劇『情け深い母』 (La madre amorosa, 1754 年初演) では子供のために犠牲となる母親を、『良き母』 (La buona madre, 1761 年初演) では一家の窮状を打開しようと奮闘する母親を描き出している。

本発表では、これら 3 人の母親を主人公とする劇作品を取り上げ、それぞれの母親像を比較考察する。母親像の考察を通して、フランスの古典主義演劇の影響を受けたイタリア演劇が、18 世紀においてどのように変容を遂げていったのかを検討したい。

第 2 日 6 月 28 日（日）13:00-13:45

会場：F304

自由論題報告（10）

デュパン夫人と初期ルソー：性差の問題をめぐって

源川 まり子（慶應義塾大学大学院）

司会：鳴子 博子（中央大学）

本報告の目的は、デュパン夫人ことルイーズ・デュパン（Louise Dupin, 1706-1799）とジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の議論を辿り、18 世紀半ばの女性論をめぐる両者の思想的連関を示す点にある。

1730 年代からサロンを開催したデュパンは、啓蒙の哲学者たちと交流した知識人であった。ルソーは 1745～1751 年の 6 年間、デュパンの秘書の職にあり、口述筆記や資料調査を担ったと『告白』で回想している。デュパンは夫のクロード・デュパンとともにモンテスキュー『法の精神』批判を執筆・公表したほか、独自の『女性論』をまとめたものの、こちらは出版されずに忘れ去られ、草稿が校訂版として世に出たのは 2022 年であった。デュパン研究はフランスにおいても未だ発展段階にあり、管見の限り日本では殆ど行われていない。

1740 年代後半に執筆されたデュパンの『女性論』では、男女の自然的平等と等しい権利を主張する極めて先進的な議論が展開された。草稿の多くはルソーの手稿によるものである。ルソーがその論旨を知ったうえで『エミール』など後年の著作を執筆したという事実は、ルソーの女性論とその変遷を理解するうえで重要である。本報告では特に、ルソーがキャリアの初期に女性を主題として書いた断章に注目したい。ルソー「女性について」Sur les femmes をはじめとする断片は、1730～40 年代にかけて執筆されたごく短い試論である。ここで若きルソーは歴史上に名を刻むヒロインを列挙しつつ、社会における主要な地位を男性が独占していることの正当性に疑問を投げかけるなど、後年の女性論に比べラディカルな議論を展開している。これらの議論とデュパンの女性論との関係を整理することに、本報告の重点を置く。初期ルソーの議論へのデュパンの影響については、例えばリーランド・ティールマンが『学問芸術論』を主題とする論考を残しているが、これはプーラン・ド・ラ・バールからデュパン、そしてルソーへと流れる影響を指摘しつつ、『学芸論』『人間不平等起源論』のいくつかの論点にデュパンの思想を読み取るものであり、ルソーとデュパンの思想的連関を具体的に論じる地点には至っていない。またスーザン＝モラー・オーキンは、初期ルソーの小論が女性の地位を擁護する議論を展開する点にデュパンの影響を示唆するが、詳細な検討は行なっていない。本報告は先行研究で提示された射程を広げ、デュパンとルソーの思想的連関を探る試みを通して、女性と性差をめぐるルソーの立場を確認すると同時に、デュパンを 18 世紀の政治思想・哲学史に組み入れる視点を示したい。

第 2 日 6 月 28 日（日）14:00-16:40

会場：F203

共通論題 趣旨説明

複数形のアメリカ——合衆国独立宣言 250 年を超えて

上村 剛（東京大学）

2026 年はアメリカ合衆国の独立宣言から 250 周年の年である。この文書は、従来は生命・自由・幸福の追求の権利という近代的な原理をうたったものとして評価されてきたが、近年ではアメリカ合衆国の有した帝國的性質や、植民地支配の限界を指摘する声も大きく、さまざまな歴史解釈がありうる。一方では独立宣言や 1776 年を中心にアメリカ合衆国の独立を理解しない、という態度もありうるし、他方では、第二次トランプ政権のように、輝かしいアメリカ建国の歴史を再評価することで、近年の多様性に富んだ歴史学研究を否定しようとする、政治的イデオロギーを含んだ態度もありうる。

これらをやや単純化すれば、つまるところ私たち 18 世紀研究者は、啓蒙とアメリカ大陸との関係をどう理解するべきか、という問題系にいきつくだろう。そこで本共通論題では、あらためて 18 世紀という時代においてアメリカ大陸が持っていた意味を、複数の地域の、複数の視点を組み合わせることで理解したい。

本共通論題の報告者は 4 名である。まず第 1 報告では上村が、1740 年代末からのブリテン帝国の政策の展開のなかで英領植民地がどのようにして独立にいたったのかを、近年の帝国史、先住民史、会社国家論の研究潮流をふまえて論じる。第 2 報告では安村直己氏が、スペイン領アメリカ植民地において、なぜアメリカ合衆国のように独立が目指されなかったのかという問題を、イギリス領植民地の比較を通じ、ヨーロッパの啓蒙からの影響と、ナショナリズムの観点から検討する。第 3 報告では王寺賢太氏がモンテスキューの『法の精神』とレナル／ディドロの『両インド史』の比較を通じて 18 世紀中盤から合衆国独立戦争期までに、フランスの哲学者たちが見るアメリカのイメージがどのように変遷したかを検討する。第 4 報告では中井亜佐子氏が、ハイチ革命を 20 世紀にどのように理解されたかという歴史叙述を、トリニダード出身の C・L・R・ジェームズの『ブラック・ジャコバン』（1938、1963）のハイチ革命論を中心に検討する。各報告者が 25-30 分報告したのち、質疑応答と、全体討論を行う予定である。

このような論点の検討と討論を通じて、南北アメリカ大陸の 18 世紀理解とヨーロッパ啓蒙の理解の紡ぎなおしを、本共通論題は目指すものである。

共通論題 報告（1）

先住民・土地所有・会社国家——アメリカ独立にいたる道の再考

上村 剛（東京大学）

祖国から遠く離れた新たな土地で、英国人はどのようにして土地所有の権利を得るのか。これは 18 世紀の英国人を悩ます問いであった。たとえば、合衆国独立前夜の 1773 年、イギリスにいたベンジャミン・フランクリンは息子に宛てた手紙で、東インド会社の場合について、二つの土地所有の方法があると説明している。一つ目は、征服によってであり、二つ目は譲渡によってである。前者の場合には、英国王に主権が付与され、臣民にも土地所有権が発生する。後者の場合には、英国王は主権を持つものの、土地所有権は持たないという法的構成を取るといふ。東インド会社の例が説明されているのは、この時期のアメリカ植民地で、インドの例が（奇妙に捻じ曲げられながら）参照されていたからである。

ここからフランクリンは、アメリカの先住民部族から土地を譲渡された植民地人は、英本国と関係なしに土地を所有でき、逆に英国王に特許状を付与する権限がない、という主張を導き出す。つまり、国籍や国家とは関係なしに土地を所有でき、なおかつ英本国から離脱して新たな国家を設立出来る可能性を示唆しているのである。このように、土地を所有する権利と、アメリカ合衆国の独立という出来事とは、密接な関係に立つものであった。

この報告では、1748 年以降の北アメリカ大陸の英領植民地が、いかにして 1776 年の独立にいたったかを、近年の二つの研究潮流を背景に再考する。一つ目は、ブリテン帝国史研究の発展によって、「両インド」を視野に入れたアメリカ建国理解をさらに発展させるべく、先住民をはじめとした、ミクロな歴史とのかけ合わせを目論む研究が進展していることである。

二つ目は、会社と国家の関係の再考である。会社国家（company-state）論の展開は、従来は距離感のあると思われてきた会社と国家とを結びつけ、国家の起源に会社を置いた歴史があることを明らかにしてきた。

そこで本報告では、1740 年代末以降のアメリカ植民地における土地所有の政治思想を検討することによって、どのように先住民との相互作用の歴史が、会社の土地所有を中心に展開され、それがアメリカ合衆国独立への道を形成したかについて考えたい。

共通論題 報告（2）

独立革命を〈南〉から見る——スペイン領アメリカ植民地との比較

安村 直己（青山学院大学）

この報告では、18 世紀スペイン領アメリカ植民地との比較を通じ、米国独立革命にいたる北米イギリス植民地との異同を明らかにする。その目的は、「複数形のアメリカ」という共通論題をめぐる討議に貢献することにある。

まず、独立革命を誘発したとされる宗主国イギリスによる中央集権化を相対化すべく、スペイン領アメリカ植民地の再編について略述する。その上で、イギリス領北アメリカ植民地住民がパリ条約から 13 年ほどで「われわれはイギリス人でありながら公正に扱われていない」という結論に達した途端にイギリス人をやめて独立を選択したのに対し、スペイン領では 18 世紀を通じてなぜそうした転換が生じなかったのか、という問いを導き出す。

続けて、その理由として、スペイン領植民地では、イギリス領植民地と異なって、ヨーロッパ本国の啓蒙言説への反発があったと論じる。ヨーロッパ知識人から、植民地生まれの白人であるクリオーリョは否定的に論じられることも多かった。それに反発するかたちで形成された、18 世紀啓蒙との関係を通じて形成される「われわれクリオーリョ」意識の曖昧さを、フランス啓蒙やスコットランド啓蒙の知識人の言説（たとえば、ラ・コンダミーヌやウィリアム・ロバートソン）と、クリオーリョの異なったアステカ、インカ理解を取り上げることで検討する。

最後に、独立後の 2 つのアメリカにおける「われわれ〇〇人」という国民の境界線に関する問題を提起したい。インディオや混血層、黒人たちが反乱するかもしれないという警戒心を抱きつつも、彼らを包摂する目的で「アメリカ系スペイン人」という奇妙なアイデンティティを形成したクリオーリョと、先住民や黒人を排除したアメリカ合衆国の人々とは、ネーション意識においても違いが形成された、と論じたい。

共通論題 報告（3）

フランス 18 世紀におけるパラグアイ布教区とペンシルヴェニア植民地の対比論の変遷
——『法の精神』から『両インド史』へ

王寺 賢太（東京大学）

本発表では、モンテスキューの『法の精神』（1748 年）とレナル／ディドロの『両インド史』（1770 年・74 年・80 年の三版）の比較を通じて、世紀中盤から合衆国独立戦争期までに、フランスの哲学者たちが見るアメリカのイメージがどのように変遷したかを検討する。焦点となるのは、宣教師による「野生人の文明化」の範例として同時代に毀誉褒貶の激しい論争にさらされたパラグアイのイエズス会布教区と、ウィリアム・ペン率いるクェーカーの植民地として喧伝された北米ペンシルヴェニア植民地の対比論である。

モンテスキューは『法の精神』(IV, 4)のなかで、この両者をスペイン植民地と対照させながら、平和的手段を用いて設立された共同体として賞賛する。しかしその対比論の主眼は、両共同体を古代ギリシアのスパルタにも比すべき「財産の平等」を旨とする共和国、ひいては「共有財産制」に基づく政治共同体とみなすところにあった。ただし、モンテスキューは、その平等な共同体を、信仰の統一、外国人との交渉の不在、均一な習俗の維持、貨幣や奢侈の不在といった諸条件を満たしうる、アメリカ大陸でのみ成立しうるものとみなしていたのだった。

他方『両インド史』では、パラグアイ布教区とペンシルヴェニア植民地は相互に対照的な評価を受ける。なるほどレナル／ディドロは第二版まで、七年戦争後スペインからのイエズス会士追放（1767 年）とともに廃止された前者を、神権政と共有財産制に基づく理想的共同体として顕揚し、布教区のグアラニ人による独立国家建設の可能性を視野に入れていた。だが最終第三版で、ディドロは先住民蜂起が起こらなかったことを確認した上で、最終的に、神権政と共有財産制の下で、布教区のグアラニ人たちは倦怠と不満を覚えてきたのだと結論づける (liv. VIII)。これに対し、ペンシルヴェニア植民地は初版の段階から、無洗礼派の狂信と徹底した平等主義を排して「寛容」を選択したのみならず、ペンの指揮下に、「所有権と自由」に基づく理想的な政治体制を確立した植民地として位置づけられる (liv. XVIII)。このペンシルヴェニアの理想化こそが、第三版では合衆国独立までの歴史叙述の起点をなし、その合衆国の維持可能性を根拠づけることになる。

以上の対比論の変遷を通じて、アメリカ大陸における植民地独立の展望から先住民が排除される経緯を振り返り、政治的自由を所有権によって基礎づける、啓蒙の哲学者たちの自由主義の限界を検討することが、本発表の最終的な目標である。

共通論題 報告（4）

一度目は偉大な悲劇として、二度目は……

ハイチ革命の叙述と再演

中井 亜佐子（一橋大学）

合衆国独立からわずか 30 年足らずの 1804 年、フランス領サンドマングは「黒人共和国」ハイチとして独立を果たした。『ヘーゲルとハイチ』（*Hegel, Haiti, and Universal History*, 2009）のスーザン・バック＝モースによれば、ハイチ革命はヨーロッパ近代哲学の形成に影響を与えていた可能性があるという。だが、この革命がよりグローバルなインパクトをもったのは、20 世紀に入ってからだった。トリニダード出身の政治理論家、C・L・R・ジェームズ（1901–1989 年）が著したハイチ革命史『ブラック・ジャコバン』（1938 年、1963 年）が植民地独立闘争を思想的に支え、世界史を大きく動かしたのである。

『ブラック・ジャコバン』はバック＝モースやピーター・ホルワードら現代の研究者からもハイチ革命史の重要文献として参照されているが、同書はたんなる史実の記録ではなく、トロツキー派のマルクス主義者としてのジェームズの歴史観に基づくナラティブである。1791 年、奴隷の蜂起に始まった革命は、ジェームズによれば、フランス革命に連動して起きた労働者革命である——プランテーション農場の奴隷は近代的労働者であり、ハイチ革命とはハイチとフランスの労働者が連帯して革命を完成させるための闘争だった。独立後のハイチはほどなく専制政治に陥り、労働者革命としては失敗に終わる。しかし、ジェームズは 30 年以上にわたってハイチ革命史を語りなおし、18 世紀末の革命の理念は 20 世紀の解放闘争に引き継がれるべきであると繰り返し主張していた。

ジェームズは歴史叙述の手本として『ルイ・ボナパルトのブリュメールー八日』（1852 年）を参照したが、同書の冒頭でマルクスは、世界史的な大事件は二度現われるというヘーゲルの言葉に、「一度目は偉大な悲劇として、二度目はみすぼらしい笑劇として」と付け加えている。だがジェームズにとっては、ハイチ革命を 20 世紀に再演するということは、悲劇でも笑劇でもない世界革命を実現することだった。本報告では、ジェームズ自身がハイチ革命の語りなおしをつうじて思想を深化させていく過程を追うとともに、『ブラック・ジャコバン』がさまざまな政治闘争、社会運動や思想に与えた影響を紹介し、二つのアメリカ大陸に挟まれた小島で起きた革命がもつ今日的意義を再評価したい。